

【第42回城戸賞応募作品】

「五〇年の孤独」

齋藤響

【あらすじ】

これは過去に飛べる少年と、未来に飛べる少女の物語だ。

尾形郷介と遊川奈々は、同じ日に同じ病院で生まれた。親同士の仲が良いこともあり、二人は幼い頃からよく一緒に遊んだ。郷介は引っ込み思案で、いつも弱気な子供。片や奈々は常に明るく、友達も多かった。

二人が十二歳になった年、奈々は自分にあつた力が備わっていることに気づく。それは、「未来に飛べる力」だった。だが、一度未来に行くのと、元の時間には戻って来られない。：そんなあまり役に立たない力だった。

奈々は自分に芽生えた力を早速、郷介にも見せる。郷介は奈々の力に戸惑い、驚くと共に僅かな憧れを抱く。同じ日に、同じ場所でも生まれたのが偶然とは思えない。自分にも何か：：奈々のような力が、あるのでないかと探る郷介。

試行錯誤の末、郷介も自分の力を自覚する。それは「過去に飛べる力」だった。奈々と同様、一度過去に行くと元の時間には戻れない。

しかし、「未来に飛べる力」と「過去に飛べる力」、この二つを併用すれば、時間を自由に行き来できる。郷介は自分の力を奈々に明かし、何度も二人で時を旅するようになる。二人の力は、共に映画制作をしている五十嵐行雄や秋山彌生には秘密である。

郷介たちが十六歳になった年。時間を行き来する過程で、奈々は自分の寿命が残り僅かであることを、未来で知ってしまう。

だが奈々は、まだ死ぬわけにはいかなかった。未来に、郷介達とどうしても共に過ごしたい時間があつたのだ。

意を決して、奈々は数十年後の未来へ飛んだ。突然消えた奈々に、残された郷介達は戸惑う。だが、どこに行つたのか分からない。郷介達は待ち続けた。いつか奈々が、必ず現れると信じて。待って、待って、待った。

そして奈々が失踪してから、二十五年後。ようやく郷介は奈々と再会することになる。奈々は十六歳の姿のままだ。二人は慣れ親しんだ劇場で、映画を共にする。それが、奈々が未来に飛んだ、ただ一つの理由だった。

【登場人物】

尾形郷介 (7・12・16・41・66)
遊川奈々 (7・12・16)
五十嵐行雄 (7・12・16・41)
秋山彌生 (7・12・16・41)
尾形由美 (24・31・36・40・65) 郷介の母
尾形彰二 (24) 郷介の父
遊川千代子 (23・30・39・64) 奈々の母
遊川新 (23) 奈々の父

二〇代男性
宏太 (50)
タクシーの男性運転手
四〇代男性医師
助産師
香代 (30)
女兒
男性医師
観客の女性
男児 A
ディレクターの男性
チラシ配りの女性
運転手の男性
その他

○福島市・遊川家・奈々の部屋（朝）（1986.05）
誰もいない。
誰かが這い出た跡の残るベッド。
勉強机の上に並んだ向日葵の種。
開かれた本には「フィボナッチ数列」の
文字。

奈々（声）「……13」
瞬間、何もない空間に、一人の少女がパ
ツと出現する。遊川奈々（12）である。
奈々はすぐさま時計を確認する。
時計は5時半を指している。
奈々は興奮で息を上げ、窓を開けて朝焼
けを眺め見る。
心地よさげに、両手を伸ばす。

○福島市（夜）（2015.12.18 現在）
空には一面、鈍色の雲。
駅前の木々には電飾が飾られ、チカチカ
とその電光を放っている。
道行く人は皆、コートを着て、各々手袋
やマフラーを纏っている。
町の中心部には、信夫山がそびえ立つ。
標高270mほどの小さな山だ。
信夫山を背にして、福島高校がある。
校舎には職員しか残っていない。

郷介（声）「2」
○映画館「シニー」・前（夜）
寂れた映画館である。

辺りは住宅街で、そこに埋もれるようだ。
入り口には、六〇代の男性ホームレスが
蹲り座っている。
郷介（声）「3」
横の掲示板には、「グリーゼ革命戦線口
大ヒット公開中！」の文字。

○同・ロビー
客は誰もいない。パンフやチラシが置か
れているだけだ。

郷介（声）「5」

○同・劇場内

尾形郷介（41）がコートを羽織り、目を瞑っている。

郷介「7」

それを見守る、五十嵐行雄（41）、秋山彌生（41）。

郷介「11」

彌生、郷介から目を逸らす。

行雄、慰めるように、彌生の手を握る。

郷介「：：13」

その声と、同時に、

奈々（声）「郷介！」

刹那、郷介が一瞬にして、消える。

○福島高校・一年二組教室（夕）（1990.12.18）

郷介（16）、机で眠っている。手で庇を作り、夕日を塞ぎ、目を閉じる。

奈々（声）「郷介」

郷介、手をよけると、奈々（16）が顔を覗き込んでいる。

郷介「（眠気眼で）奈々…：？」

奈々「12月18日、夜、7時、シニー前に集合」

郷介「18日って…：今日だろ？」

奈々「12月18日、夜、7時、シニー前」と、去っていく。

郷介、起き上がり、

郷介「だから、それは」

奈々、振り返って、

奈々「必ず待ってて！みんなも一緒に！」と、郷介を指さして去る。

郷介、あくび一つ、窓越しに遠くの街並みを見渡す。建物がみな紅く染まる。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）

学ランのポケットに深く手を突っ込み立つ、郷介。吐く息は白い。

壁にデカデカと貼られたポスターにもたれ掛る。

ポスターには、「リバイバル上映　グリ
ーゼ革命戦線！」の文字。
映画館は三つの建物が連なってできて
いる。郷介がいるのは2番館。
郷介N「僕達はいつも一緒にいなくちゃいけ
なかったのに」
そこへ歩いて来る、行雄（16）。
行雄「お、珍しいな。郷介が一番乗りなんて。
こりゃ雪でも降るかな」
郷介「僕は学校から直行だから。監督は？」
行雄「塾終わって……だから、ギリギリだろ」
と、郷介の隣に立つ。
郷介N「いつも、すれ違ってばかりいた」
そこへ自転車でやって来る、彌生（16）。
息を切らせている。
彌生「（ずれた眼鏡を直し）ごめん。塾が」
行雄「大丈夫、監督は3番」
彌生「あれ、奈々は？」
郷介、肩をすくめ、
郷介「言い出しつぺなんだけどね」
行雄「もう寒いしさく先に中入ってようぜ」
彌生「奈々は、映画を見るとは言ってなかつ
たでしょ？」
行雄「映画館で待ち合わせて、ジェットコー
スターに乗る奴はいねえよ」
と、我先に入って行く。
彌生、溜息一つ、行雄に続こうとして、
彌生「郷介も、行こう？」
郷介、ぼんやりと空を眺めていて、
郷介「（気づくのが遅れ）……あ、ああ」
と、彌生と共に映画館へ向かう。
入り口で郷介、再び立ち止まり、空を見
上げる。
郷介の手に、はらはらと粉雪が落ちる。
郷介「……ほんとに降った」
郷介N「結局、遊川奈々は約束の場所に現れ
なかった」
郷介と彌生、映画館に入って行く。
郷介N「その日を境に、遊川奈々は僕達の前
から、消えた」

○タイトル「五〇年の孤独」

○東京都・映像制作会社「ビヨンド」・前
(2015.12 現在)

古びたビルの三階に位置している。
郷介(41)、階段を上って来る。

○同・内

社内には映画のポスターがここここに貼られている。

テーブルには山積みの本。シリーズ化された百貨辞典で、寸法と厚さは皆同じだ。郷介と二〇代男性、黙々と本に別のカバーをかけていく。

カバーには「プラズマ宇宙論」や「暗黒物質」、「超弦理論」などの文字が見える。プリンターから続々と出てくるカバー。男性がカバーを切り抜き、郷介がテープで本にカバーをかける。

男性「あくもうこれ絶対終わんないっすよ」

郷介「うくん、終わんないかもね」

男性「じゃ、途中でもいいですか？」

郷介「うくん、(微笑み)ダメだね」

男性「やっぱりっつてか、これ必要ですか？」
と、カッターの刃を折る。

郷介「まあ、一応天才科学者の自宅……という設定らしいからね」

男性「なんすか、天才科学者って……昭和のアニメかよ！」

矢庭にボタンと戸が勢いよく開き、宏太(50)がスマホで電話をしながら入って来る。

宏太「居ないって、どういうことですか？」
と、机や椅子にぶつかりながら、奥の事務所へ入って行く。

宏太「はあ?! じゃ明日からどこ行けばいいんだよ？」

郷介「……もう、今日はこれぐらいで」
男性「まじすか? よっしゃ!」

○同・階段

郷介と宏太、並んで煙草を吸う。

郷介「大丈夫：：じゃないですよね？」

宏太「郷介君さ、この会社好き？」

郷介「まあ、好きでも嫌いでも：：仕事はやり
ります」

宏太「そうか：：よかった」

郷介「：：？」

宏太「明日から、別の会社探してくれる？」

郷介「え：：それはリストラ、ですか？」

宏太「いや、じゃなくて、無くなるから：：
ここ」

郷介の銜えていた煙草の灰が、ぼろりと
落ちる。

宏太「まあ、君は仕事できるんだし、もっと
さ、自信のある顔で働きなよ」

郷介「（恐縮し）は、はい：：」

宏太「君なら、何処でもやっつけていけるって」
と、郷介の肩をポンと叩き、去っていく。

○同・渋谷駅前（夕）

夥しい人、人、人。

どこもかしこもクリスマス間近の広告や
装飾で一杯だ。

郷介、人波に押し流されて歩く。ふと顔
を上げると、「グリーゼ革命戦線」のポ
スターがデカデカと貼られているのに
気づく。

郷介、ポスターを見上げたまま、その場
に立ち尽くす。

人々が立ち止まった郷介を避けて、隣を
通り過ぎていく。

○福島県・福島市（夜）（1974.11）

月は雲に隠れている。

郷介N「僕たちは同じ年、同じ日、同じ時間、
同じ場所で生まれた」

皆寝静まり、閑静な町。

そこへ響き渡る女性の呻き声が二つ。

○道路A・車内（夜）

尾形由美（24）、夫の尾形彰二（24）が運転する車の後部座席に座る。

由美、腹部を押さえ、陣痛に耐える。

彰二「大丈夫か？ 病院、すぐ着くからな」

由美「（痛みで応えられない）はっ、はっ！」

刹那、周囲が数秒前と同じ景色になり、

彰二「大丈夫か？ 病院、すぐ着くからな」

由美「（不思議に思うが）……う、ううう！！

（すぐに陣痛が甦りそれどころではない）」

○道路B・タクシーの車内（夜）

遊川千代子（23）、夫の遊川新（23）に付き添われて座る。

新「ちよつと、もつとスピード出ないんですか？！」

タクシーの男性運転手、ミラー越しに後ろを睨み、

運転手「無茶言わないで下さいよ！」

千代子、腹部を押さえ、陣痛に耐える。

新「あとどれくらいですか？！」

運転手「あと……10分」

新「もつと急いでください！」

と、次の瞬間、窓の外には産婦人科医院が見え、車が院前に停車する。

千代子「（不思議そうに）もう着いたの？」
新「全く何があと10分だ？！ 散々迷いやがって！」

と、千代子を支えながら降りていく。

○産婦人科医院・事務室（夜）

四〇代男性医師、ソファで横になり、顔に本を載せて寝ている。

本の題名は「40代からの数学講座」。

そこへ助産師が走って来る。

助産師「先生！」

医師、その声で飛び起き、咄嗟に本を落とす。

助産師「急患、二名です！」

医師、眠気眼で立ち上がる。

○同・分娩室

ベッドで呻く、由美と千代子。二人のベッドは連なっている。

彰二と新は、互いの妻に付き添っている。悠々とカルテを持って歩いて来る男性

医師。医師は由美と千代子のベッドを行ったり来たりする。

医師「はくい、息を吸って、吐いて」
由美「ひ、ひ、ふうくひ、ひ、ふうく…うううう、痛い！」

医師「はくい、痛いですね。だから他のこと考えましようね」

千代子「ほ、他のことって言ったって…：あああ！！」

医師「じゃ、貴女は素数を順番に数えてみましょうか。ま、何でもいいんですが」

由美「そ、素数？ ああああ！」

医師「はい、じゃあ数えてく」

由美「ひ、ひ、1、2、3」

医師「1は、違いますね。2からです」

由美「2…：ひ、ひ、ふうく、3…：よ、じやなくて、5」

医師「はい、その調子」

医師「次は千代子のベッド。貴女はそうですね。フィボナッチ数でも数えてみますか？」

千代子「フィ、フィボナッチ数って…：なんでしたっけ？ ううう！」

医師「ほら向日葵の種の並びの」

千代子「1、1、2、3って前の数を足して」

医師「はい、じゃあ数えてく」
千代子「はい、1…：1…：一足す一は…：2…：二足す一は…：3」

× × ×
空にあった雲は風で流れ消える。代わり
に夜空には、赤い皆既月食が現れる。

× × ×
病院中の時計。その長針が高速で時計回
り、短針が反時計回りに回転し始める。
だが誰も気づかない。

由美「(息が荒い) 7」

由美と千代子、お互いに気づく。

千代子「(目には涙を溜めて) 5」

由美、ゆっくりと千代子に手を伸ばす。

由美「(痛みが最高潮に) 11」

千代子も由美に手を伸ばす。

千代子「(ほとんど言葉にならない) 8」

由美と千代子、共に手を繋ぐ。

由美・千代子「(悲鳴のような叫び) 13！」

その声を合図に、響き渡る赤子の産声が
二つ。

○同・病室(別日)

由美と千代子、隣り合ったベッドで、楽
しげに会話する。

千代子「名前はもう決めました？」

由美「はい。故郷の郷に、介で郷介。遊川さ

んは？」

千代子「私も！ 奈良の奈を二つで、奈々」

○同・玄関(別日)

由美と千代子、赤ん坊を抱え、二人一緒
に出てくる。

郷介N「僕達の母親は、病院で意気投合し、
退院してからも頻繁に会うようになった」

○公園(1981.05)

ベンチで話す由美(31)と千代子(30)。

滑り台の頂に立った郷介(7)。下を見て、
後退る。由美の方を見るが、千代子と話
しており、気づいていない。

郷介、恐る恐るしゃがみ込む。

ドン！と郷介は突如、後ろから押され、

滑り台を滑り、と言うより転がり落ちていく。地面に顔面をぶつけ、泣き目で振り返る。
滑り台の頂では、奈々(ナ)が意地悪い笑みで、郷介を見下ろしている。

○レストラン(別日)

由美と千代子、郷介と奈々が食事をして

いる。

郷介、フォークに突き刺したニンジンを口の中に放り投げる。苦い顔で、ゆっくりと嚥下する。

郷介、誇らしげに由美を見るが、由美は千代子との会話に夢中で気づかない。

郷介、仕方なく由美の裾を引っ張り、

郷介「お母さん。ニンジン」

由美「(振り向いて)なに? あら、またニン

ジン残して。まったく郷介つたら」

郷介、驚いて皿を見ると、ニンジンの欠片が置かれている。

千代子「あら奈々、今日は嫌いなニンジン食べられたの? 偉い、偉い」

と、奈々の頭を撫でる。

奈々、誇らしげに郷介の顔をちらと見る。

○河原の道(別日 夕)

一人トボトボと歩く郷介。

その後ろから奈々と行雄(コ)、彌生(ナ)が走って来て郷介を追い抜いて行く。

奈々「もう始まつちやうよ!」

行雄「わぁ、間に合わねえ!」

彌生「行雄がトロいから!」

奈々、ふと立ち止まって、郷介を顧みる。

郷介と奈々の目が合う。

奈々「郷介も、行かない?」

郷介「(おどおど) え……あ、でも」

行雄(声)「おっ、奈々!」

奈々「(振り返り)……うん!」

と、また走り出す。

郷介N「奈々は頭がよく、明るく、友達を作

るのが上手かった。僕の目には、彼女はいつも輝いて見えた：：いつも憧れてた」
郷介、去っていく奈々たちの背中を見つめる。

○東京・レストラン（夜）（2015.12 現在）

郷介、香代（30）と食事を共にしている。

香代「そうでしょう、郷介君？」

郷介「（ぼうっとして聞いておらず）え、あ：：うん、そうだね」

香代、呆れてナイフをテーブルに置き、

香代「どこから聞いてなかったの？」

郷介「（誤魔化すように笑って）聞いてたよ」

香代「（あからさまな溜息）もう、ダメだね」

郷介「：：ダメって？」

香代「：：郷介君ってさ、もし明日私が死んじゃっても、きっと泣けないでしょ？ 葬式には来てくれるし、弔辞も読んでくれるだろうけど、きっと涙は流さない」

郷介「：：そういう例え話は、冗談でもしない方がよいよ」

香代「郷介君はさ、いつも遠い所にいるんだよ。私と居ても、心はどこか遠くに在って、どんなに私が近づいても、貴方は私なんか見てない。どんなに優しい言葉を言っても、それでも、それは全部遠い場所に居る、他の誰かに向けられた言葉なんだよ。私は誰と居て、誰と話してるの？ この半年間、私はずっと貴方の隣にいたけど、私はいつも一人だったよ」

と、鞆を持ち、お金を置く。

郷介「お金は、いいよ」

香代「ほら、止めもしない」

と、自嘲気味に笑って去る。

郷介、肅々とワインを飲む。

○アパート・1階（夜）

郷介、郵便受けから手紙やチラシを掴み、階段を上がっていく。

○同・一室

郷介、帰宅し、明かりを点ける。散らかった室内が、蛍光灯に照らされる。テールブルの上には写真立。十六歳の郷介、奈々、行雄、彌生が映る。各々映画の機材を持っている。郷介、ソファに倒れ込み、振り込み用紙やチラシを眺めては捨てていく。その中に一通の封筒。差出人の名はない。郷介、封筒を破き、中から一枚の紙を取り出す。それは「原発即刻稼働停止」等を訴えるチラシだ。郷介、首を傾げ、チラシを裏返す。そこには「12月18日、夜、7時、シニ―前」の文字。郷介、驚愕し、思わず手を離してしまう。床に落ちた紙。その末尾には「遊川奈々」の署名がされている。

○福島小学校・廊下く階段（朝）（1986.05）

ひた走る、奈々（12）。生徒や先生たちを次々に追い抜いて行く。

郷介 N「ある何でもない朝に、僕たちの人生は一変した」
奈々、階段を一段飛ばしで駆け上る。

○同・六年一組教室

郷介（12）、机で教科書を広げる。そこへ奈々が走り込んでくる。郷介の前に立ち、息を整える。

郷介「どうしたの、そんなに走って。いつもなら遅刻しても歩くのに」

奈々「（息を切らせながら）い、今……朝、だよね？」

郷介「（首を傾げ）……夜には見えないよ」

奈々「それがね！ 夜だったの！」

と、目を輝かせ、郷介の手を握る。

奈々「さっきまで、夜だったんだよ！」

奈々、辺りの生徒達を見て、

奈々「放課後、一緒に来て」

郷介、キョトンとしている。

○同・校舎裏

郷介、奈々に続いてやって来る。

郷介「ど、どこまで行くの？」

奈々「こちら辺で良いかな」

と、立ち止まる。

奈々「みんなには内緒だからね」

と、手を差し出す。

郷介「……？」

奈々「握って」

郷介「（赤面）え、あ、でも、そういうのは」

奈々「早く」

郷介、恐る恐る奈々の手を握るというように、指でつまむ。

奈々「目を瞑って」

郷介、瞼を閉じる。

奈々も瞼を閉じ、

奈々「1、1、2、3、5、8……13」

○同（夕）

何もない空間に、奈々と郷介が突如出現する。

奈々「目を開けて」

郷介、目を開けた瞬間、驚愕し辺りを伺う。いつの間にか、頭上の空は、茜色に染まっている。

郷介「……え、太陽が動いた?!」

奈々「（溜息）私たちが動いたの」

郷介「で、でも、どうやって？」

奈々「昨日の夜、お母さんに教えてもらって

ファイボナッチ数列を数えてたの。そして、

気が付いたら、朝になってた」

郷介「……寝ちゃったの？」

奈々「違うよ。一瞬で朝になったの。まるで

夜が突然、消えたみたい」

郷介「奈々が何を言ってるのか、僕には……」

奈々「私は目を瞑ってファイボナッチ数を数え
ると、未来へ行ける。でも行きっ放しで、
一度行くと元の時間には戻れない」

郷介「ふい、ふいぼなっち？…未来？」
奈々「…私、未来に行けるんだ」

○同・校門前

一緒に歩く郷介と奈々。

行雄・彌生（声）「奈々〜！」

奈々、顧みると、校舎の窓から行雄（12）と彌生（12）が顔を出している。

彌生「奈々、探してたんだよ？」

奈々「（大声で）あ、ごめん！」

行雄「（郷介を顎で指し）ソイツは？」

奈々「郷介だよ。ほら、家が近くで今は同じクラス。前に話したでしょ？」

行雄「ふくん…それよりさ、撮影の続きしようぜ！」

と、8ミリビデオカメラを掲げる。

S O N Y の「CCD-V8」だ。

彌生「お願いね、女優さん」

と、指でファインダーを作り、奈々を覗き見る。

奈々「うん、任せてよ！」

と、郷介に向き直り、

奈々「郷介も出てみない？」

郷介「出るって？」

奈々「映画。みんなで撮ってるんだけど、人が足りなくて…ねえ、どう？」

郷介「（たじろぎ）いや、でも僕は…ごめん」

行雄「奈々〜？」

奈々「今、行く！（郷介に）そっか。じゃ、また明日！」

と、校舎の方へ駆け出していく。

郷介、奈々の背中を見つめながら、

郷介「1、1、2、3、5、8…13」

しかし何も起こらない。

郷介、小さく溜息を漏らす。そして振り返り、下校していく。

走っていた奈々。矢庭に立ち止まり、郷介を顧みる。

トボトボ歩く、郷介の小さな背中。それを見つめる奈々の双眼。

○尾形家・居間（夜）

由美（36）と郷介、夕食をとる。

郷介「ねえ、母さん」

由美「なんだい？」

郷介「前に話してくれたよね。僕と、奈々が同じ病院で生まれたって」

由美「遊川さん家の奈々ちゃん？ そうだよ」

郷介「その時、母さん、もしかして……何か数字を数えなかった？」

由美「数字？」

郷介「うん。奈々のお母さんは、ふいぼなつち数列を数えたって」

由美「フィボナッチ数列？ 私はそんなの数えてないよ。数え方も知らないんだもの」

郷介「そう、だよね」と、俯く。

由美「ああ、そういうえば、素数なら数えさせられたよ」

郷介「素数？ほんとに？」

由美「お医者さんが数えなさいつて、ね」

郷介「その、素数って何なの？」

由美「えつとねえ、1とその数でしか割り切れない数だったかな。3とか、17とか。他の数字じゃ割り切れないでしょう？」

郷介「そうか、素数か……（指折り数えて）1、2、3……」

由美「（大笑い）ははっは！ 1は素数じゃないよ」

○同・郷介の部屋

郷介、ノートに書いた素数を眺め、覚えている。

時計は9時を指している。

郷介「2、3、5、7、11……13！」

しかし何も起こらない。

郷介「（ムキになって）17、19、23、27……101！」

と、畳の上に倒れこむ。
郷介、目を瞑って、

郷介 「2、3、5、7、11、13」

○同（1時間前）

郷介、目を開ける。

辺りは明かりが点いておらず真っ暗だ。パッと起き上がり、時計を見る。8時だ。郷介、目を輝かせ、部屋を飛び出す。

○同・階段

郷介、階段を下りていくと、下の居間から声がする。

郷介（声）「前に話してくれたよね。僕と、

奈々が同じ病院で生まれたって」

由美（声）「遊川さん家の奈々ちゃん？ そうだよ」

郷介、そこではたと立ち止まり、忍び足で階段を下りて、居間を覗く。

そこには、夕食をとる由美と、もう一人の郷介。過去の郷介だ。（以下、郷介P）

郷介 「?!」
と、咄嗟に口を押さえて、また階段を上っていく。

○同・郷介の部屋

郷介、頭を抱え、部屋の中をぐるぐる回る。

郷介 P（声）「ごちそうさま！」

と、階段を上ってくる音。

郷介、慌てて押入れの中に隠れる。隙間から部屋を覗き見る。

すると郷介Pが入ってきて、ノートに素数を書き始める。

郷介、何度も自分の目をこする。

× × ×

郷介 P、畳の上に倒れこむ。目を瞑って、郷介 P 「2、3、5、7、11、13」

その刹那、郷介Pが忽然と消える。

郷介、押入れから這い出てくる。ノートを見つめ、

郷介 「目を瞑って、素数……素数か！」

○福島小学校・廊下(階段(翌日 朝))

ひた走る、郷介。生徒や先生たちを次々に追い抜いて行く。
郷介、階段を一段飛ばしで駆け上る。

○同・六年一組教室

座って教科書を広げる、奈々。

郷介、息を切らせ、走り込んでくる。

奈々「珍しいね。郷介が走ってくるなんて」

郷介、奈々の前に立ち、息を整えながら、

郷介「ぼ、僕にも……できたんだ」

奈々「(キョトンとして)？」

郷介「昨日、素数を数えて……それで僕は

飛んだんだ……ぼ、僕は過去に行ける」

奈々「(その顔は徐々に驚きへ変わり)郷介！」
と、嬉しげに笑う。

○同・下駄箱(夕)

郷介と奈々、一緒に歩く。

郷介「でも危うく過去の自分と鉢合わせする

所だったよ。もし会ってたら……」

奈々「そりゃ郷介、消えちゃうよ」

郷介「え？」

奈々「郷介が過去の自分と会って、過去を変えるってことは、この今も変えることになるじゃない？ そしたら、今の郷介は消えちゃうでしょ？」

郷介「(よく分からず、ぼうっとしている)」

奈々「バック・トゥ・ザ・フューチャーだよ！

見てないの？！」

郷介「(タイトルを知らず)？」

奈々「いい、今度ビデオ貸してあげるから。

とにかく、過去は変えちゃダメなの。それが鉄則なんだから」

郷介「うーん、でも過去を変えちゃダメなら、

こんな力、意味ないんじゃない？」

奈々「私のだって、同じだよ……でも」

行雄・彌生(声)「奈々！」

奈々、顧みると、階段を下りて、行雄と

彌生がこちらへ歩いて来るのが見える。
彌生「奈々、また勝手にいなくなつて！」
奈々「あ、ごめん、ごめん！」
行雄「（怪訝に郷介を見て）またソイツと？

何してたんだよ？」

奈々、郷介に目配せしている。

郷介「ちよ、ちよつと明日の授業のことで」

行雄「ふくん：：それよりさ、早く撮影の続

きしようぜ！（と、カメラを掲げる）」

奈々「うん：：ねえ、郷介も」

郷介「既に後退っており、

郷介「僕は、いいよ：：また明日」

と、足早に下校していく。

奈々、その背中を見つめている。

彌生「奈々？ もう日が沈んじゃうよ」

奈々「ごめん！ もう少し待ってて」

と、郷介を追いかけて走り出す。

行雄「おい、奈々！」

その声は届かず、不機嫌そうに腕組む。

○同・校門前

一人歩く、郷介。

その手を突然掴む、奈々。

郷介「驚いて振り返る。」

奈々「自分の背中、見たことある？」

郷介「：：？」

○同（数分後）

一人歩く未来の郷介。（以下、郷介F）

郷介F、立ち止まり振り返るが、踵を返

すこともなく、また歩き始める。

その様を校舎の陰から見ると、郷介と奈々。

奈々「これを私は、いつも見てたんだよ」

遠くなつていく、郷介Fの背中。

奈々「この背中を、郷介にも見せたかったの」

郷介、驚き、困惑した顔で郷介Fを見る。

奈々「できるなら、もう私は：：この背中を

見たくない」

郷介、深呼吸一つ、奈々の手を握る。

奈々、驚き、郷介を見る。

郷介「（目を瞑り）2、3、5、7、11……
13」

○同・下駄箱（数分前）

奈々と行雄、彌生は共に階段を上る。

郷介、走り戻って来る。

奈々「（振り返り）郷介」

郷介、奈々たちを見上げ、

郷介「あ、あの……」

行雄「な、なんだよ？」

郷介「ぼ、僕も（言葉選びに悩み）一緒に、

いいかな？……映画……ダメ、かな？」

郷介、彌生を見て、行雄を見て、奈々を見る。

行雄や彌生、互いに顔を見合わせ、

彌生「今は……人手不足だから」

行雄「……俺は別に……監督がいいなら」

奈々「（安心し、微笑み）行こう、郷介」

郷介「（ぎこちなく笑い返し）うん」

と、奈々たちと共に階段を上り始める。

○同・屋上（カメラの映像）（夕）

立っている郷介と奈々。

郷介、空を指さし、

郷介「（明白な棒読み）あ、なんだあれは？」

奈々も空を見て、

奈々「（こちらは自然に）どこ？」

郷介「ほら、あの空に輝く」

奈々「……UFO？」

彌生（声）「カット！」

○同・（カメラ映像が終わり）

彌生、自由帳を丸めて持ち、郷介に歩み寄り、

彌生「ダメ。ぜんぜんダメ」

と、郷介の頭を叩く。

カメラを構えていた行雄も、

行雄「そうだよ。もつと感情込めてさ。フィルムがもつたいたい！」

彌生「いい？ これは本格SF活劇なの！」

猿の惑星の、テイラー船長ぐらいの演技力が
必要なのよ！」

郷介「猿の惑星って？」

行雄「猿の惑星も知らねえの？！」

彌生「ほら、もう一回シーン12から、練習！」

郷介「……あ、なんだあれは？」

彌生「もう、ぜんぜん直ってない！」

奈々「初めてなんだから、仕方ないじゃない」

彌生と行雄、奈々を見て黙る。

奈々「今日はもう遅いし、また明日撮り直せ

ばいいでしょう？」

行雄「そ、そうだよな……俺もそう思った」

彌生「（行雄を睨み）分かった」

奈々「そして郷介は明日までに台詞を完璧に
すること。いい？」

郷介、こくりと頷く。

彌生、手を叩き、

彌生「じゃあ今日はここまで！」

○河原の道（夕）

奈々、郷介、行雄、彌生、一緒に歩く。

彌生、自由帳に書かれた脚本を見ながら、

彌生「明日の昼は、UFOの墜落シーンを撮

りましたよ」

郷介「映画作りって大変そうだね」

行雄「ほんと大変だよ。通行人は邪魔だし、

カメラは重いし、監督はうるさいし」

彌生、行雄の頭を自由帳で叩く。

郷介「そのカメラは、行雄の？」

行雄「親父のだよ。28万もしたんだってよ！」

郷介「へえ、お金持ちなんだ」

行雄「金なんて持ってないよ。ないけど買っ

たんだ」

郷介「……ああ、そう」

○T字路（夕）

行雄と彌生、郷介と奈々で別れて帰る。

奈々「じゃ、また明日！」

行雄・彌生「また明日！」

郷介も手を振る。

郷介「(奈々を見て) ありがとう」

奈々「何が？」

郷介「全部だよ。全部、奈々のおかげだ。僕一人じゃ、きつと何一つ……」

奈々、郷介に向き直り、

奈々「この未来は、私と郷介が作ったんだよ？」

郷介「……う、うん。まだ実感ないけど」

奈々「私は未来、郷介は過去。片方だけじゃ意味のない力だけど、二人一緒なら何でも変えられる。どこへでも行ける」

と、手を差し出す。

郷介、微笑み、奈々の手を握る。

奈々と郷介、共に目を瞑る。

その場から、二人は忽然と消える。

○東北新幹線・車内(2015.12 現在)

郷介(41)、送られてきた手紙、その「遊川奈々」の文字をずっと見つめている。

アナウンス(声)「まもなく、福島です。停車の際揺れることがあります……」

郷介、荷物を持ち、席を立つ。

○尾形家・郷介の部屋(夕)

今は使われておらず、所々に埃が溜まる。壁には色あせた「グリーゼ革命戦線」のポスター。

郷介、引出しから、古めいた小箱を取り出す。包装用の青いリボンが付いている。小箱をポケットに入れ、出て行く。

○同・居間

郷介、コートを羽織る。

テレビを見ている母、由美(65)。

由美「アンタ、夕飯は？」

郷介「今日は何行雄たちと会うって言ったろ？」

由美「魚買っちゃったよ」

郷介「明日食べるよ」

由美、郷介を顧みて、

由美「アンタ、まだそのコート着てるの？」

郷介「まだ着られるよ」

由美「ボロボロでしよう。まったく」

由美「アンタが毎年こっちに帰って来るって言うのと、周りは孝行な息子だって、そりや褒めてくれるだけ……：実際私はいつも、胸が締め付けられる想いでね」

郷介「（驚いて由美を見る）？」

由美「奈々ちゃんがいなくなってから、アンタ毎年、同じ日に出かけて……：ずっと聞かなかったけど、何かあるんだろう？」

郷介「（押し黙る）……」

由美「最近帰って来ないから、もう忘れたんだと思っただけ……：やっぱり、まだ」
郷介「（由美の言葉を遮り）行ってきます」と、出て行く。

由美「ああ、郷介！」

ボタンと、戸が閉まる音。

由美、息を漏らし、テレビに戻る。

○商店街（夕）

郷介、歩きながら、辺りを眺め見る。

シャッターの閉まった店が多く、片隅にはホームレスたちの姿が見え隠れする。そこへ何処からともなく、

女兒（声）「……1……2……3」

郷介、ハツとして振り返る。

すると、5才ほどの女兒が目を瞑って、数字を数えているのに気づく。

女兒「……4……5……6」

走り去っていく他の子供たち。

どうやら、かくれんぼのようだ。

郷介、安堵し息をつき、また歩き出す。

○福島高校・一年二組教室（1990.07.19）

机を囲み、真剣な面持ちの四人。郷介

（16）、奈々（16）、行雄（16）、彌生（16）。

郷介N「そして1990年、遊川奈々が消えた年……：僕たちは高校一年生だった」

各々が、小道具を作っている。段ボール、ガムテープ、ペンキ類を駆使し、機械を

模したSFのセットを作る。
彌生「ガンテープを投げ出し、
彌生「ぜんぜん足りない」
郷介「汗を拭いながら、
な？ スターウォーズを超えるセットは」
行雄「そうだよ。せめて学校から助成金でも
ありゃ話は別だけど」
と、ビデオカメラを皆に向けている。
カメラはSONYの「CCD-V9001」。
奈々「でも、認めてくれないんでしょ、映画
部？」
彌生「お前らにやるほど、金は余ってないだ
って！」
郷介「……不景気だからね」
彌生「金、金、金！ きっと大人の辞書には、
カ行しかないのよ！」
奈々「なら、可哀想……は知ってるね」
彌生「ああ、もう！ 文化祭まで時間はない、
お金もない、おまけに熱い！ 最悪！」
郷介「……夏だからね」
彌生「行雄、アイス買って来て！ あと、赤
のペンキも！」
行雄「えええ」
彌生「じゃあ、郷介！」
郷介「（目を逸らし）うーん」
彌生「（ざっと立ち上がり）もう、二人で行っ
て来て！」

○同・駐輪場

郷介の運転する自転車の荷台に行雄が乗
る。自転車は学校前の緩やかな坂を下っ
ていく。

○福島高校

夏休みだが、校内では文化祭の準備、校
庭では野球部などの運動部が練習をし
ている。

○同・一年二組教室

窓から郷介達を眺める、奈々と彌生。
奈々「文化祭での上映、間に合うかな？」
彌生「早くセツトと衣装が出来れば……」
奈々「別に焦らなくてもいいんじゃない？」
彌生「奈々を見る。」
奈々「高校生活は三年間。卒業までにできれば、ね？」
彌生「女優は悠長だねえ」
奈々「なら妥協して無理くり完成させる？」
彌生「（目の色が変わり）妥協は……しない」
奈々「（微笑み）だよ、監督」

○スーパー・内

郷介と行雄、アイスを選んでいる。郷介の手には、ペンキの入ったビニール袋。
郷介「監督、何がいいんだろ？」
行雄「アイツは小豆バー買ったけば大丈夫」
郷介「小豆バーを取り出し、」
郷介「渋いね。奈々は？」
行雄「奈々は……わかんね。分かんねえよ」
郷介、行雄を見つめる。

○河原の道

今度は行雄が漕ぐ自転車の荷台に、郷介が乗る。行雄たち、二人乗りをしたカップルを追い抜く。
行雄、カップルを一度振り向いて見る。
郷介「なに？」
行雄「いやさ……いいよな。ああいうの」
郷介「……行雄は好きな女子いるの？」
行雄「うん、うん」
と、自転車を左右にくねらせて走る。
郷介「危ない、危ない！」
行雄「洋画でスゲ美女ばっか見てると、どうしても日本人じゃ物足りないよなあ」
郷介「日本人は可愛くない？」
行雄「うん、まあ比べちゃうと」
郷介「原田知世は？」
行雄「あれは例外だよ」
郷介と行雄、一緒になって笑う。

行雄「でも、強いて言えば」

郷介「？」

行雄「……奈々は可愛いよ」

郷介「……（聞こえないほど小さく）うん」

○福島高校・女子トイレ

奈々と彌生、洗面台で手を洗う。

奈々、ふと彌生を見て、

奈々「監督」

彌生「なに？」

と、振り向いた瞬間、奈々に眼鏡を奪われる。

彌生「あ、ちよつと！」

奈々「やっぱり、眼鏡がない方が可愛いよ！」

彌生、鏡に顔を近づけ、

彌生「よく、見えないから」

奈々「（自分で眼鏡をかけてみて）コンタクトは？」

と、度が高すぎ、すぐに眼鏡を外す。

彌生「高いから」

奈々「勿体ないなあ。その顔見たら、彌生の

こと好きになる男子沢山いると思うけど？」

彌生、眼鏡を奪い返し、

彌生「別に好きでもない人に、好かれても」と、眼鏡をかけ直す。

○同・廊下

奈々と彌生、一緒に歩く。

奈々「じゃあ誰になら好かれたいの？」

彌生「（溜息）もう、いい加減に」

奈々、彌生の手を握り、

奈々「ね、教えて！ 誰にも言わないから！」

彌生「……前に好きだった人はいた。でもソ

イツは、他の人が好きみたいだから」

奈々「諦めたの？！ え、それって誰？ 誰？」

彌生、奈々の手を振りほどき、

彌生「秘密」

と、また歩き出す。

奈々「ええり」

と、ついでに行く。

○同・一年二組教室

郷介と行雄、買ってきたペンキやアイス
を机に置きながら、

行雄「文化祭、もうすぐだな」

郷介「上映は、ちよっと厳しいね」

行雄「俺さ、今度さ」

郷介「……なに？」

行雄「今度、奈々を誘おうかと思ってるんだ」

郷介「（驚きを隠し）誘うって、映画？」

行雄「いや、文化祭。一緒に回らないか、つ
て。なあ、どう思う？」

郷介「……いいと、思うよ」

行雄「（安堵し）そうか。お前がいいって言う
なら」

郷介「でも、どうして……そんなこと僕に」

そこへ彌生と奈々が帰って来る。

行雄「（アイスを掲げ）ほら、溶けちゃうよ」

奈々「ありがとう！」

と、皆でアイスを食べ始める。

奈々「私のは？」

行雄「ああ、これ」

奈々「わくこれ丁度狙ってたんだ！」

郷介、行雄と話す奈々を見つめる。

彌生、奈々と話す行雄を見つめる。

○映画館「シニー」・前（夕）

郷介、奈々、行雄、彌生が歩いて来る。

行雄は自転車を押している。

行雄「ああ俺の夏休みが終わっちゃう」

彌生「みんなの、夏休みだよ」

行雄「夏休みみて時間が歪んでるよ。気が付
いたらすぐ秋だもん」

行雄「ふと映画館前の掲示板に目をやる。

行雄「あ！あ！」

と、引き返し、掲示板を指さす。

奈々「なに？」

と、皆で引き返して見る。

彌生「え、嘘！」

奈々「やった！」

郷介は相変わらず、きよとんとして見る。掲示板には「グリーゼ革命戦線、続編の製作が決定！」「5年後に公開予定！」「続編決定記念、リバイバル上映！」の文字が見える。

郷介「グリーゼって？」

奈々「そっか、郷介は見えてないんだ」

彌生「SF映画の金字塔だよ！今撮ってる映画も、実はそのオマージュがね」

行雄「ビデオ貸して（やろうか）いや、折角再上映するんだ。みんなで見ようぜ！」

奈々「そうだね！」

彌生「うん、そうしよう！」

郷介「何だか分からないが、つられて笑う。」

○T字路（夕）

郷介と奈々、行雄と彌生で別れて帰る。

行雄「おおくなんかやる気出てきたな」

彌生「よっし、絶対撮影終わらせるよ！」

行雄「分かってるよ、監督！」

郷介「郷介、行雄たちの声を背中で聞き、郷介「そんなに良い映画なの？」

奈々「あの映画は、私達が映画作りを始めたきっかけだよ」

郷介「そっか……」

と、奈々を見つめる。

夕日が奈々の顔を照らし出す。奈々のワイシャツが汗で濡れ、少し透けて見える。

郷介「気まづく目を逸らす。」

○公園（夕）

郷介と奈々、公園を突っ切って歩く。

奈々「文化祭、間に合うと思う？」

郷介「まだ、分からないよ」

奈々「ブランコを立ちながら乗り、勢いよく飛び降りる。」

奈々「ねえ、確かに行かない？」

郷介「確かめるって、未来で？」

奈々「(頷き)間に合っていればそれで良いし、もし間に合ってなければ、未来でその原因を見つければ、ね？」

郷介「もし未来に行っても、どうにもできなかったら？」

奈々「…：それは未来で考えるよ」

郷介、苦笑し、奈々の手を握る

郷介と奈々、共に目を瞑る。

奈々「1、1、2、3、5、8…：13」

二人の姿がパッと消失する。

○福島高校(1990.09.02)

文化祭当日。

人でごった返す。

その人ごみの中に郷介と奈々の姿。

○同・特別教室前

そこには「上映会、中止のお知らせ」と書かれた貼紙。

郷介と奈々、それを見て、

奈々「やつぱり…：」

郷介「とにかく、僕達を探そう」

奈々「じゃあ二手に別れて。文化祭終わりに、ここへ再集合！」

○同・校内

どこもかしこも人で溢れ返る。

人ごみに紛れて歩く、郷介。

× × ×

クラスメイトを避けて歩く、奈々。

○同・校門前

郷介、物見遊山しながら、歩いてくる。

そこには未来の奈々が立っている。(以下、

奈々F)

郷介、咄嗟に柱の陰に隠れる。

そこへやって来る、行雄。

行雄「悪い、寝坊」

奈々F「(意地悪く笑い)こんな時まで？」

行雄「だから、謝ってるだろ？」

と、一緒に歩き出す。
郷介、奈々Fを見つめ、そつと後を追う。

○同・体育館前

奈々、やって来る。
入り口で彌生と未来の郷介が話している。
(以下、郷介F)。

彌生は眼鏡をしていない。

奈々、咄嗟に自販機の陰に隠れる。

彌生「ごめんね、無理言つて」

郷介F「僕は暇だから……監督、眼鏡は？」

彌生「今日は、コンタクトなの」

郷介F「(驚きを隠し)そう……いいと思うよ」

彌生「……ありがとう」

と、二人は一緒に歩き始める。

奈々、郷介Fを見つめ、後を追う。

○同・校内

二人で回る奈々Fと行雄。

野外の出店や、教室を改装して作られた
お化け屋敷、体育館のバンド演奏など。

× × ×
その様子を遠くで見続ける、郷介。

○同・廊下

郷介Fと彌生、ジュース片手に、歩く。
向かいから、奈々Fと行雄も歩いて来る。
行雄と彌生、気づくが互いにぎこちなく
会釈するだけだ。

郷介Fと奈々Fの目が合う。だが結局、
何も言わずに、すれ違う。

× × ×
その様子を見ていた郷介と奈々。互いに
気づき、無言でその場を去る。

今度は郷介が郷介Fの、奈々が奈々Fの
後について行く。

○同・校門前(夕)

文化祭も終わり、客たちがぞろぞろと帰
っていく。

○同・渡り廊下

彌生「郷介Fと彌生、人の流れを見下ろす。」

郷介「郷介とこんな長い間に長い間、二人きりだったの初めてだよね」

郷介F「そうかもね」

郷介「そこへ忍び足でやって来る郷介。校舎の陰から二人を見守る。」

郷介F「(沈黙を破り) 残念だったね、映画」

彌生「まあ：：私は映画監督になるのが夢だから：：夢だったから」

郷介F「監督なら、なれるよ」

彌生「かぶりを振って、」

彌生「無理だよ。だって私、女だもん」

郷介F「関係ないと思うけど」

彌生「じゃあ、誰か有名になった女性監督の名前を挙げてみなさいよ！ 誰でも、子供でも知ってる名前を！」

郷介F「：：ごめん」

彌生「(声を落ち着かせ) ……いや、私も」

○同・中庭

奈々Fと行雄、ベンチに座りジュースを飲む。

奈々F「来年こそ、上映したいね」

行雄「(息を漏らし) 監督、きつと怒ってるんだろうな：：自分に」

奈々F「監督のせいじゃ、ないのにね」

行雄「そうだよ。天気も悪かったし、どれだけ手際よくやっても、絶対終わらなかった」

二人を草陰から伺う、奈々。

行雄「奈々、あのさ：：こんな時になんなんだけど：：俺」

見ると奈々Fが蟀谷を押さえている。

行雄「お、おい、大丈夫か？」

奈々F「う、うん：：ちよつと疲れちゃったみたい」

行雄「無理するなよ。歩けるか？」

と、奈々Fに肩を貸し、共に歩き出す。
奈々「(見つめるだけで、動けない) ……」

○同・渡り廊下

彌生「今日はごめんね。付き合わせちゃって」

郷介 F「当てつけ……じゃないよね？」

彌生「え？」

郷介 F「行雄が奈々と回るから……だから監

督は僕と？」

彌生「ち、違う……違うよ」

郷介 F「誤魔化すように、ただ笑う。

彌生、横目で郷介を見て、

郷介 F「ほんとに、違うから」

と、彌生の方を見た瞬間、彌生が郷介 F

にキスをする。

郷介 F「?!（驚いて目を見開く）」

陰で見ていた郷介も同様の顔。

彌生、郷介 F から離れ、

郷介 F「これ、一応初めてだから」

郷介 F と彌生、互いに気まずく目を合わ

せられない。

郷介、静かにその場を去ろうとするが、

落ちていた空き缶を踏んでしまう。

彌生「(音で振り向き)誰？」

郷介、駆け足で走り去っていく。

郷介 F と彌生、互いに顔を見合わせる。

○同・特別教室前

郷介、汗だくで走って来る。

奈々、壁にもたれ掛り、待っている。

奈々「どうしたの？」

郷介「ちよつと……そっちは、どう？」

奈々「上映は……やっぱり無理かもね」

郷介「でも、それじゃ監督が」

奈々、肩をすくめ、自嘲気味に笑い、

郷介「じゃ、私達が悪者になろう」

と、手を差し伸ばす。

奈々「? 分からないけど……分かったよ」

と、手を差し伸ばす。

奈々、その手を握る。

奈々、その手を握る。

○福島高校（1990.08.14）

生徒たちは文化祭の準備で慌ただしい。各クラスで衣装を作ったり、内装を作ったり、演劇の練習をしたり。学校の外に居ても、生徒たちのはしゃぐ声が聴こえてくる。

彌生（声）「はぁ?! 失くした?!」

○同・一年二組教室

郷介、頭を下げている。

奈々、行雄、彌生、郷介を前にして、

彌生「現像したフィルムを? 失くした?」

行雄「（大笑いで）やっちゃまったな!」

彌生、台本で行雄を殴り、

彌生「教室は? 家は? 全部探したの?!」

奈々「私も手伝ったけど、なかったの」

郷介「ごめん、監督! 本当にごめん!」

奈々「失くしたものは仕方ないよ。問題は、これから、どうするか? でしょ、監督?」

彌生、腕組みし、唸る。

行雄「でも、どうする監督? 撮り直すか?」

彌生「そんな時間ないでしょ! まあ、妥協すれば今あるカットで、何とか一本の映画に仕上げることはできる……」

彌生、ちらと奈々を見て、

彌生「……けど、それじゃ意味がない」

奈々「（微笑み）だよ、監督」

彌生「残念だけど、上映会は来年に延期!」

郷介「（安堵し）……よかった」

彌生「でも……郷介は罰として次の現像代を払うこと!」

郷介「……お、鬼だ」

行雄「ま、落ち込むなって。俺も負担してるよ……百円位なら」

○映画館「シニー」・前（夕）

郷介、奈々、行雄、彌生、歩いて来る。

彌生「上映会がないと、当日は相当暇だね」

奈々「ねえ折角だから、文化祭は皆で回らない? お化け屋敷とか、演劇とか!」

郷介「僕はお化け屋敷以外なら……」
彌生「まあ、特にやることもないしね」
行雄「……そう、だな」
郷介、行雄の横顔を見つめている。
その奥には「グリーゼ革命戦線、リバイバル上映」の貼紙が見える。

○公園（夕）

郷介と奈々、一緒に帰る。

奈々「あうなんか疲れちゃった」

と、ブランコに座る。

郷介も隣に座る。

郷介「僕も……嘘は苦手だ」

と、鞆を開けると、そこには沢山のフィルムが入っている。

奈々、フィルムを夕日にかざして見て、

郷介「時期を見て、出そうね」

と、自嘲気味に笑う。

奈々「……私さつきね、行雄に言われたの。

一緒に文化祭回らないか、って」

郷介「……どうして？」

奈々「（苦笑い） どうしてだろうね？」

郷介「（奈々に向き直り）僕も、言ってみてい
いかな？」

奈々「……？」

郷介「……一緒に、見に行かない？……僕と、
あの映画を……今からでも」

と、恐る恐る手を差し出す。

奈々「（ハツとし）四人じゃなくて、二人で？」

郷介「（苦笑し）僕も、ダメなのかな？」

と、手を下げかける。

奈々、呆気にとられていたが、やがて、
笑顔に変わり、

奈々「（頷き）いいよ……郷介となら」

と、郷介の手を握り返す。

郷介も微笑み、目を瞑る。

奈々も目を瞑り、

奈々「1、1、2、3、5、8、13」

と、二人はその場から、消える。

○映画館「シニー」・劇場内（1990.11）

満員の観客席の中に、郷介と奈々の姿がある。

二人共目を輝かせ、食い入るように映画を見ている。

× × ×

エンドクレジットが画面に映し出され、場内が少しずつつ暗くなっていく。

奈々、郷介の方を向き、

奈々「（小声で）ねえ」

郷介、奈々の方を向いた瞬間、奈々の唇が郷介のそれに近づく。重なる瞬間は、真っ暗で見えない。

やがて場内の明かりが点き、観客が歓声と共に出て行く。

お互いの顔を見つめている郷介と奈々。

奈々「これ、私のファーストキスね」

郷介「（なんとかな言葉を選び出し）……僕も」

○福島駅前（夕）（2015.12.18 現在）

郷介（41）、待っている。

そこへ彌生（41）が手を挙げ、歩いて来る。眼鏡はなく、コンタクトだ。

郷介も手を挙げて応え、

郷介「暫く、監督」

彌生「もう、その言い方やめてよ」

と、一緒に歩き出す。

彌生「まだ来たの？」

郷介「いや、僕もここ数年は……」

彌生「私なんか10年ぶりだよ。みんな仕事があるんだし」

郷介「でも、行雄は未だに、待ってる」

彌生「……今日は、どうして呼びつけたの？」

郷介「悪かったね。突然」

彌生「それは、いいんだけど」

郷介「……今日は、今年こそは……ってさ」

彌生「まだ、できるの、アレ？」

郷介、かぶりを振って、

郷介「やってないよ。この25年は、一度も」

○道く映画館「シニー」(夕)

郷介と彌生、連れ立って歩く。

彌生「(辺りを見て)あ、あそこ、コンビニに
なっただよ…知ってた？」

郷介「(肩をすくめ)いや…」

向いから来た女子高生の集団とすれ違う。
制服は福島高校のものだ。

彌生「(ちらと女子高生を見て)今、考えると
…姉弟みたいだったよね」

郷介「誰が？」

彌生、郷介を指さしながら、

彌生「郷介が弟で、奈々がお姉さん。アンタ
はいつも、奈々の半歩後ろを歩いてた」

郷介「随分、遠い事みたいに言うんだな」

彌生「…だから言うけど、私、奈々に憧
れてたんだ。それと同じくらい妬いてて、

ほんの少しだけ嫌いだった…だからこそ
今、こんなにも寂しいんだよ」

郷介「僕も、同じだよ。ずっと憧れてた…
でも」

彌生、郷介の横顔を見る。

郷介「僕は彼女にはなれない」

彌生、一度俯き、再度前を向くと、目の
前には映画館「シニー」が見えている。

○映画館「シニー」前(夜)

上映が終わり、客が出ていく。

行雄(ト)、出口で立ち、

行雄「ありがとうございました」

と、そこで目の前に郷介と彌生がいるの
を見つける。

行雄「郷介！…と、そっちは」

彌生「久しぶり」

行雄「監督！」

彌生「だから、その呼び方は」

行雄「ほら、早く入れよ。珈琲でいいか？」
と、店の看板を「OPEN」から「CLOSE」
に変える。

郷介と彌生、中へ入って行く。

郷介、ふと振り返ると、六〇代の男性ホームレスが店の前にしゃがみ込んで居座るのを見る。

行雄「郷介、ポップコーン食うだろ？」

郷介「あ、ああ」
と、中に入り、戸を閉める。

○同・前

昔、三館あった映画館は、今は一館だけになっていく。かつての二番館だけが残り、他の場所はマンションや空き地になっていく。

二番館には「グリーゼ革命戦線」のポスターが貼られている。

○映画館「シニール」劇場内（1990.11）

郷介（16）、奈々（16）、行雄（16）、彌生（16）、並んで映画を見ている。

郷介N「そして、三か月後、みんなでもう一度あの映画を見た。みんな楽しそうにしてきたけれど、僕はまったく内容が頭に入って来なかった」

郷介、横目で皆を見る。

行雄も彌生も映画に夢中だ。

奈々も同様だ。

○同・前

上映が終わり、沢山の観客たちが溢れ出て来る。その中には、郷介、奈々、行雄、彌生の姿も。

彌生「やっぱ、この映画は最高だよ！」

行雄「よし、俺も行くぞハリウッドに！」

郷介と奈々、互いに目を向け合う。

○T字路

郷介と奈々、行雄と彌生で別れて帰る。

奈々「何度見てもいいね、あの映画は」

郷介「（浮かぬ顔で）……うん」

奈々「どうしたの？」

郷介「いや、え、何が？」

奈々「……五年後だよ、続編」

郷介「僕は21歳。大学生か、はたまた浪人生か」

奈々、急に何かを思いついたように笑い、郷介の手を掴む。

郷介「え？」

奈々「気にならない？ あの映画の続編」

郷介「そりゃ気になるけど」

奈々「じゃ、決まりだね」

と、目を瞑る。

○映画館「シニール」前（1995.12）

郷介と奈々、掲示板を見ている。

デカデカと貼られた『ショーシャンクの空に』のポスター。

そして隅の方に雑誌の切り抜き記事。

「グリーゼ革命戦線、撮影トラブル！！」

「公開延期！ 数年先に見送りか？！」

奈々「ええ、折角来たのに！」

郷介「あの監督、頑固そうでもないな」

奈々「（不満そうで）ん〜ん〜」

と、郷介の手を握り、

奈々「もつと先だ」

○同（2000.12）

郷介と奈々、掲示板を見ている。

デカデカと貼られた『スクリーム3』のポスター。

奈々「もつと先！」

○同（2005.12）

郷介と奈々、掲示板を見ている。

デカデカと貼られた『エターナル・サンシャイン』のポスター。

三館あるうちの、1番館が消えているが、二人は気づかない。

奈々「もつと！」

○同（2010.12）

郷介と奈々、掲示板を見ている。

デカデカと貼られた『ユキとニナ』のポスター。
3 番館も消えているが、同様に気づかない。

奈々「もつと！ もつと！」

○映画館「シニー」(跡地) (2015.12)

郷介と奈々が現れる。

だが、そこは空地になっており、何もない。

郷介「(唾然) ここで合ってるよね」

奈々「そのはずだけど……」

と、各々辺りを歩き、映画館を探す。

郷介、遠くに大きなビルが建っているのに気づく。

奈々、道の反対側を数人の中年が歩いて行くのを見る。

そのビルにはデカデカと「グリーゼ革命戦線」 という広告が出ている。

奈々、その中年たちをじっと見つめる。それは未来の郷介(▲)、行雄(▲)、彌生(▲)。三人は、喫茶店に入っていく。

奈々、三人について行く。

郷介「奈々：：もしかして、あれって」と、振り返るが、奈々はいない。

郷介、溜息をつき、もう一度ビルを見る。

○喫茶店内

奈々、柱を挟んで未来の郷介達とは反対側の席に座る。(以下、郷介F)

○ビル・前

郷介、その高いビルを見上げている。

辺りは家族連れやカップルで溢れている。

○喫茶店内

奈々、アイスコーヒーを飲みながら、聞き耳を立てる。

行雄「続編も最高だったな、なあ監督？」
彌生「いい加減、やめてよ。その呼び方」
郷介F「確かに面白かったな……四人で見られれば、もつと」

行雄と彌生、急に黙り、
彌生「……仕方ないじゃない」

行雄「ま、俺も映画見ながら、同じこと考えてたけどさ」

郷介F「そうだよな……うん、変なこと言つて悪かった」

彌生「来週、みんなで奈々の所行ってあげましょう」

郷介F「ああ、久々に三人揃ったことだし」
行雄「命日ぐらい行ってやらないと、奈々の

ヤツ怒りそうだしな」
奈々、ストローを口にしたまま、固まっている。そして、音をたてないように席を立ち、足早に去る。

○ビル・5階・映画館

そこは、大きな映画館になっている。
あちこちに置かれたテレビ画面で予告

編が流れる。

長い列のできたポップコーン売り場。

郷介、そこで「グリーゼ革命戦線」の
チラシを見つけ、掴む。

○公衆電話・前

奈々、息を切らせ走って来る。震える手で小銭を入れ、電話をかける。奈々、唾を呑み込む。

電話が繋がり、奈々の母千代子（64）が
電話に出る。

千代子（声）「はい、遊川です」

奈々「もしもし、私、昔中学でおたくの奈々
さんと仲の良かった佐々木ですが」

千代子（声）「……そうですか、何の御用でしょうか？」

奈々「久しぶりに実家に帰ったので、奈々さんと会いたいなと思ったのですが、ご不在

ですか？」

千代子（声）「ああ……ご存じないんですね」
奈々「……え？」

千代子「奈々は、25年前に亡くなりました」
奈々「……どうして？……なんで、ですか？」

千代子（声）「脳梗塞で……脳血栓があったとかで」

奈々「の、脳血栓？……それは、いつ？！
何日ですか？！」

千代子（声）「正確には1990年の12月19日でした。わざわざ、お電話して頂いたのに申し訳ありません」

奈々「いえ、いいんです……」

と、呆然として受話器を離す。

千代子（声）「あの、失礼ですが、下の名前を伺っても？」

奈々、受話器を置いて、切ってしまう。
ふらふらと歩き出す。

○映画館「シニー」（跡地）（夕）

奈々、やって来る。

郷介、チラシを折って紙飛行機にしている。

郷介「どこ行ってたの？」

奈々「ちよつと……それは？」

郷介「あそこのビル、新しい映画館なんだ」と、チラシを広げて見せる。

奈々「25年……遅すぎるよ」

郷介「なんだか、酷く騒がしい映画館だった」と、再びチラシを紙飛行機にする。

奈々「見に行く？」

郷介「いや……やっぱり、あの映画は皆で、四人で見るべきだよ」

奈々「……そう、だね」

郷介「それに未来の情報を過去に持って帰っても、ロクなことにならない」

奈々「（面食らって）え？」

郷介「バック・トゥ・ザ・フューチャーだよ。見てないの？」

と、笑って紙飛行機を飛ばす。

奈々も、小さく笑い返す。
郷介と奈々、無言で手を繋ぎ、目を閉じる。
紙飛行機が、静かに空地へ落下する。

○映画館「シニー」・ロビー（2015.12 現在）

テールブルを囲む郷介（41）、彌生（41）。
行雄（41）、ワインボトルを持って来る。

郷介「おいおい、この貼紙が見えないのか？」

と、「場内禁煙・アルコール厳禁」という
ポスターを指す。

行雄「誰にもものを言ってるんだ？」

と、栓を抜く。

彌生「どうぞご自由に、館長さん」

○同・劇場内

ワイン片手に歩く郷介、行雄、彌生。

彌生「昔のまんま！ お客はちゃんと入ってるの？」

行雄「潰れない程度には、ね」

郷介「懐かしいな。あれ、上映してるのか？」

グリ：：「
行雄・彌生「グリーゼ革命戦線」！」

行雄「俺は映写してるから。もう20回は見たよ」

彌生「私は忙しくて、中々：：」
行雄「郷介もまだか？」

郷介「ああ。見られる機会はあったけど：：
僕は四人で見たかったから」

彌生「：：そうだよね」
行雄「急に顔をしかめ、

行雄「なら、四人で見ればいいだろ？」
彌生「行雄」

行雄「お前なら、それができるだろ？　なあ、
郷介」

郷介「（行雄から目を逸らし、腕時計を見る）」

行雄「お前が、お前がさあ、過去に戻って、
奈々がどこに消えたのか確かめてくりゃい

いんだ！ いや、むしろどこにも行かせるな！ お前が止めてこい！」
と、郷介に歩み寄るが、彌生がそれを制す。

彌生「ちよっと飲み過ぎだよ」

行雄「コイツの力は本物だ。今更それを疑うのか？」

彌生「そうじゃないけど」

行雄「彌生の手を除けて、郷介の前までやって来て、胸倉を掴み上げる。」

行雄「なんで今になって戻って来た？！

奈々が消えた時、お前は真っ先に過去へ戻るべきだったんだ。お前なら過去を、こんな今を変えられた：：俺にはできないけど」

郷介、彌生を見る。

しかし彌生は気まずく、目を逸らす。

郷介「：：僕にだって、無理だよ」

行雄「(頭を振り)お前はいつもそうやって：：どうして逃げる？：：なあ郷介、お前は今まで、一度でも、何かを、自分で選び取ったことがあるのか？！」

郷介、行雄から目を逸らし続ける。

○デパート・前(1990.12.16)

待っている、郷介(16)。

そこへ彌生(16)がやって来る。

郷介「(手を挙げ)ごめんね、呼び出して」

彌生「今日は塾ないから：：で、何をすればいいの？」

郷介「うーん、女の子って、何を貰ったら嬉しいのかなって」

彌生「：：奈々にあげるの？」

郷介「(照れ隠し頭を掻き)ほら、なんか最近、奈々元気ないだろ？ プレゼントあげれば元気戻るかなって」

彌生「(呆れ笑って)それに、来週はクリスマスだしね」

郷介「ま、それもある」

彌生「(息を漏らし)手伝ってあげるわよ。私じゃ参考にならないと思うけど」

郷介「そんなことないだろ。監督は女の子な
んだから」

彌生「（一瞬、ハッとするが）……さっさと行
くよ」

と、中へ入って行く。

○市内・病院

男性医師、奈々に聴診器を当てる。

医師「特に問題はないね。めまいがする？」

奈々「はい……なにか私病気じゃ？」

医師「今調べた限りでは健康そのもの。まあ、

大きな病院に行けば、誰でも悪い所が5か

所は見つかるけどねえ」

奈々「あの……脳血栓って、何ですか？」

医師「ああ最近多いね。若い子でも気づかず

になってたりするし、兆候が見つけにくい

から、突然来るんだよ」

奈々「それって、治りますか？」

医師「……そうだね、まずはMRIで血栓の

場所を特定して」

奈々「（即座に）じゃあ、して貰えませんか？！

そのMRIを！」

男性医師、最初は呆気にとられているが、

すぐにそれは大きな笑いへ変わり、

医師「ははっは、最近の子は心配性だなあ」

奈々「私、本気で言ってるんですけど？」

医師「（笑いを堪え）分かっている、分かっている

よ……でも目ぼしい症状もないのにMRI

をするのはねえ。中々高いんだよ、検査費。

だから、君の場合はまずCTを撮って」

奈々「それは、いつできますか？」

医師「うーん、予約の都合もあるから、また

来週来てくれるかな？」

奈々「突如立ち上がり、

奈々「来週じゃ、遅いんです！」

男性医師、唾然として固まる。

奈々「……もう、いいです」

と、足早に出て行く。

医師「……お、お大事に」

○T字路（夕）

郷介と彌生、一緒に歩く。

郷介の手には青いリボンのついた小箱。

郷介「大丈夫かな、ほんとに」

彌生「初めての贈り物にしては上出来だよ」

郷介「そうか：：うん、そうだよね」

彌生「見かねて、郷介の頭を叩く。」

彌生「自信持って渡しなよ。私、アンタたち

のこと応援してるんだから」

郷介「あ、ありがとう。監督」

彌生「俳優の管理も監督の仕事だからね」

と、手を挙げて去っていく。

郷介も手を上げて応え、反対方向に歩き

出す。

○遊川家・奈々の部屋（夕）

奈々、カレンダーを見ている。12月1

6日の所に指を置き、19日まで順番に

数える。

奈々、大きく息をつき、ついで深呼吸を

する。

○同・居間

奈々、子機で電話をかける。

奈々「もしもし奈々です：：あ、行雄？ あ

のね、明日：：」

○福島高校・一年二組教室（翌日）

郷介、奈々、行雄（16）、彌生が集まっ

ている。

彌生「あと三日でクランクアップ？」

行雄「無茶だよ、そりゃ」

奈々「私の出るシーンだけなら、撮り終るで

しょ？」

郷介「（台本を見ながら）でも、この満天の星

空をバックに、ってシーンはどうするの？

裏山？」

彌生「私は門限あるから、流石に夜は」

行雄「俺だって、親父に叱られるよ」

奈々「それは、私が何とかするから」

郷介「何とかかって」
奈々「とにかく、裏山に行こ！ さ、監督仕
切って、仕切って！」
と、皆を急き立てる。
郷介と行雄、顔を見合わせ、肩をすくめ
る。

○信夫山・山道

郷介、奈々、行雄、彌生、機材を持ち、
坂を上って行く。
行雄「（肩をさすり）いや、冷えて来たなあ」
彌生「そろそろ雪でも降るんじゃない？」
奈々、一人深刻な面持ちだ。
それを見つめる、郷介。

○同・山頂

木々の間を抜けると、開けた場所に出る。
郷介、奈々、行雄、彌生、やって来て、
行雄「ふううう！（大げさに息を吐く）」
郷介「ここなら、きつと良い画になるね」
彌生「でも星が出るには、まだまだ時間が」
奈々、行雄と彌生の手を握り、
奈々「じゃあ、夜を追いかけに行こう」
郷介、驚いて奈々を見る。
奈々、既に目を瞑っている。
郷介、大きく深呼吸し、行雄と彌生の手
を握る。
四人は手を繋ぎ、輪を作る。
奈々「1、1、2、3、5、8……13」

○同（夜）

満天の星空の下、郷介、奈々、行雄、彌
生が現れる。
行雄「（夜空を見上げ、驚愕し言葉がない）」
彌生「（驚嘆し）……奈々？」
奈々、無理に笑って、
奈々「さあ、撮影を始めよう？」

× × ×
彌生は台本のチェック、郷介は小道具を
配置している。

○同・屋上（夕）

郷介、行雄、彌生、演技をする奈々を見つめる。

彌生「……カット！」

皆、一斉に息を漏らす。

彌生「遊川奈々さん、クランクアップです！」
郷介達三人から細やかな拍手が送られる。

奈々「（大きさに笑って見せ）ありがとうございます
います！」

○同・階段

奈々、降りていく。

それを追いかける郷介。

郷介「奈々」

奈々「（振り返って）？」

郷介「聞こうと思ってたんだけど」

奈々「何を？」

郷介「大丈夫か？ 何かあった？」

奈々「え、どうして？」

郷介「なんか最近、元気ないし……それに皆にバラしちゃっただろ？」

奈々「……もう隠し事は、嫌だったから」

郷介「そう……それは僕もだけど……あ、あと来週さ！」

奈々「来週？」

郷介「24日、なんか用事ある？」

奈々「……用事は、ないよ」

郷介「（顔を明るくし）そっか！ なら、よかった。うん、うん」

と、階段を颯爽と上って行く。

奈々「（郷介を見つめ続ける）……」

○同・廊下

行雄と彌生、機材を抱えて歩く。

彌生「信じられる？ 奈々の……郷介も」

行雄「この目で見ちまったもんは、信じる他ねえだろ」

彌生「私はね、ずっと四人でいるのが楽しか

ったよ。この皆なら信じられる。何でも話せるって……でも郷介達は、違うのかな？

行雄「俺達は、ずっと、四人だったよ」

彌生「……」

行雄「これからだって、四人だろ？」

彌生「……うん。ごめん」

○遊川家・居間く玄関（翌日 朝）

奈々、朝食を終え、鞆を持ち立つ。

皿洗い中の千代子（39）、

千代子「今日は予報だと雪みたいだし、鍋に

でもしようか？」

奈々「……そうだね。いいね」

千代子「映画もいいけど、早く帰って来るの

よ？（笑い）鍋、冷めちゃうから」

奈々「（共に笑い）行ってきます、お母さん」

奈々「……玄関で靴を履き、振り返り、

と、家を出て行く。お母さん」

千代子（声）「いつてらっしゃい！」

○福島高校・一年二組教室（夕）

放課となり、生徒たちが下校していく。

郷介、眠気眼で机から顔を上げる。

隣の席の彌生が訝しげに、

彌生「もう、夕方。いつまで寝てるの？」

郷介「まだ、夕方？（溜息）もっと早く、

日が沈めばいいのに」

彌生「なに、それ」

郷介「いや、別に意味はないけど」

彌生「郷介も塾入れば？ その寝ぼけた頭が

シヤキツとするから」

と、鞆を持ち、出て行く。

郷介「また明日」

と、再び机で眠り始める。手で庇を作り、

夕日を塞ぎ、目を閉じる。

× × ×

奈々が重い足取りでやって来る。

郷介の他に生徒はいない。

眠っている郷介を見つげ、近づこうとした瞬間、頭を押さえ壁にもたれ掛る。奈々、肩を上下させ、息を整える。そして、一歩ずつ歩み寄る。

奈々「（郷介を見つめて）……私、死ぬんだ。ねえ、聴こえる？」

郷介の吐息だけが返って来る。

奈々「私、怖いんだ。死ぬことより、皆から忘れられるのが……私はずっと、皆の中に居たいんだよ。いつまでも、私を覚えていて欲しいんだよ……ねえ、これって我儘かな？ 私、ずるいかな？」

と、郷介に顔を近づけて、

奈々「（弱弱しく笑い）ごめんね……郷介」

郷介、ようやく目覚め、奈々に気づく。

郷介「（眠気眼で）奈々……？」

奈々、ゆっくりと口を開け、

奈々「12月18日、夜、7時、シニー前に

集合」

郷介「18日って……今日だろ？」

奈々「12月18日、夜、7時、シニー前」

と、去っていく。

郷介、起き上がり、

郷介「だから、それは」

奈々、振り返って、

奈々「必ず待ってて！ みんなも一緒に！」

と、郷介を指さして去る。

郷介、あくび一つ、窓越しに遠くの街並みを見渡す。建物がみな紅く染まる。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）

学ランのポケットに深く手を突っ込み立つ、郷介。吐く息は白い。壁にデカデカと貼られたポスターにもたれ掛る。

○同（2015.12.18 現在）

行雄（41）が郷介（41）の胸倉を掴み上げて、迫る。

行雄「郷介！」

郷介、ゆっくりと行雄の手を掴み、

郷介「……怖い」

郷介「……怖い」

郷介「あの日に戻るのが、怖くて仕方ない。

(自嘲して) 本当は、忘れようと思ったんだ。奈々のことも、皆のことも……全部。

忘れれば、乗り越えたことになると思った。

(頭を振り) なのに、忘れられない。何処

へ行って、何をしても、思い出が追いかけて来る。選りにも選って、楽しかった

思い出ばかりが。(苦笑して) 僕にとっては、

過去は凄く近い場所にあるんだよ」

行雄、呆気にとられ、掴み上げた手を離

してしまふ。

郷介「過去に戻っても何も変えられないんじ

やないかって……自分は結局、奈々と一緒

にいたくちや、一人じゃ何もできないんじ

やないかって……それが、怖かった……だ

けど……もう……関係ない」

と、深呼吸一つ、行雄を正視する。

郷介「奈々と最後に行った未来が今年だった。

だから今年こそ、今日こそは、って思った。

今日が僕にとつて……最後の日だった」

と、腕時計を見て、

郷介「でも、それも間違いだったよ」

腕時計は夜の7時を指している。

郷介「監督、コート取って来てくれないか？

外は寒いだろうから」

× × ×

郷介、コートを羽織る。

それを見守る行雄と彌生(41)。

行雄「ありがとう」

郷介「感謝するには早いよ」

行雄「それでも、ありがとう」

彌生「……ちよつと、待って」

郷介「？」

彌生「郷介が過去を変えたら、今のこの世界

はなくなる。そしたら、過去に飛んだ郷介

も消えちゃうんじゃないの？」

行雄、郷介を顧みる。

郷介「そうだね。消えちゃうかもね」

彌生「かもねって！ 笑い事じゃ」

郷介「いいんだ。僕は奈々のいない、こんな

今は、もう……僕は待ち過ぎた」

彌生「……」

郷介「じゃ、そろそろ行くよ」

と、目を瞑る。

郷介「2、3、5、7、11……13」

郷介の言葉と同時に、

奈々（声）「郷介！」

郷介「?!」

と、目を開ける。

次の瞬間には、その場から郷介が消えている。

行雄と彌生、啞然として郷介が去った空白を見つめる。そしてゆっくりと振り返る。

入り口には息を切らして立つ少女。奈々（16）。奈々の目は見開かれている。

○映画館「シニー」・2番館・劇場内（夜）
（1990.12.18）

突然、郷介（41）が現れる。

郷介「奈々！」

と、手を伸ばした先には観客の女性。

上映中だ。

女性「（突然で驚愕し）いえ、人違いです」

○同・前

行雄（16）に続いて、彌生（16）と郷介（16）も中に入って行く。

それを陰から見ていた奈々。静かに去る。

○同・ロビー

郷介（41）、劇場から飛び出してくる。そこには過去の郷介達三人達。

郷介、過去の郷介達には顔を隠し、足早に出て行く。

○道（夜）

郷介が走って来て、辺りを伺う。

道の先を奈々が歩いている。
郷介「…：…：奈々」

奈々は路地に入って見えなくなる。
郷介、奈々を追って、走る。

○路地裏（夜）

奈々、歩きながら、目を瞑る。

奈々「1、1、2…：…」

そこへ郷介が走って来る。息を切らし、汗だくだ。

奈々「（郷介に気づかない）3、5、8…：…」

奈々、歩き続ける。

走る郷介と奈々の距離は徐々に縮まっていく。5 m、4 m、3 m。

郷介「（息が上がり）な、…：…：奈々！」

と、躓きそうになりながら、奈々に手を伸ばす。2 m、1 m。

奈々「（郷介の声と同時に）1 3」

突如、奈々は消え去る。

郷介の伸ばした手は空を掴み、そのまま倒れ込む。

郷介「ああ…：…：ああ、ああ」

と、拳を握り、地面を叩き、呻く。

郷介「（嗚咽のような呻き）あああ…：…」
俯く郷介の上に、真っ白な雪が落ちて来る。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）

郷介（16）、行雄（16）、彌生（16）が出てくる。

目の前には、びっしりと雪が積もり、そこには足跡一つない。

それを見つめる郷介達。

× × ×

物陰から過去の郷介たちを見ていた郷介（41）。静かにその場を去る。

○福島高校・一年四組教室（別日）

授業中だ。

教室にぼっかり空いた空席が一つ。

行雄、その空席を見つめている。

○福島銀行

郷介（41）、ATMにカードを入れ、現金を下そうとしている。
しかし、入れたカードはそのまま返って出てきてしまう。
郷介、憤り、小さく壁を拳で打つ。

○遊川家・前（別日）

郷介（16）、行雄、彌生、家を訪ねている。
目の前には奈々の母、千代子。
千代子、かぶりを振っている。
郷介達、一礼し、去っていく。
× × ×
郷介、唇を噛み、突如走り出す。
行雄も彌生も、郷介を追えない。

○福島市内（夜）

郷介、奈々を探して町中を駆け巡る。
公園や福島高校、信夫山、福島小学校、
河原など……。

○映画館「シニー」前（深夜）

郷介、走り疲れ、遂に立ち止まる。壁に手を付き、息を整える。
その場に頹れ、虚ろな目で、映画館を見つめる。

○尾形家・郷介の部屋（別日 夕）

郷介、プレゼントの小箱を見つめ、机の引き出しにしまう。

○同・前（夜）

郷介（41）、やって来て、窓の外から中を覗き見る。
そこでは郷介（16）と、その母、由美（40）が夕食を共にしている。会話の内容は分からないが、二人は楽しげだ。
郷介（41）の目には、涙が溜まる。

○福島高校・廊下（別日 夕）
郷介、行雄、彌生、映画の撮影を続ける。
だが三人の顔に、以前のように楽しげな
笑みはない。

○橋の下（夕）
郷介（トコ）、座り込み、ビールを飲む。
そこを小学生の男児たちが通りかかる。
そのうちの一人男児Aと、郷介は目が合
う。しかしすぐに目を逸らし、男児たち
は足早に去っていく。

○福島高校・特別教室（1991.09）
文化祭が行われている。
郷介（17）たちは、教室の一つを借り、
完成した映画の上映会をしている。
観客は疎らだ。
スクリーンに映し出される「消えたジャ
コビニ流星群」というタイトルクレジッ
ト、満天の星空、演技をする奈々。
画面に映った奈々を見つめる郷介、行雄
（17）、彌生（17）。

○路地裏（朝）
郷介（42）、ゴミ袋を漁っている。髭が伸
び、髪もボサボサだ。

○映画館「シニール」・2番館・前（夜）
郷介（17）、行雄、彌生、壁にもたれ立っ
ている。
彌生、腕時計を見ると7時だ。

○学習塾・教室（1992.05）
彌生（18）、他の生徒たちと共に、授業を
受けている。
壁には「目指せ、偏差値65！」や「絶
対合格！」という貼紙。

○福島高校・三年一組教室

授業中、郷介（18）は必死にペンを走らせる。
しかし行雄（18）は、ペンを回しながら、
台本を直している。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）
郷介、行雄、彌生、今年も待っている。

○福島駅前（夜）
クリスマスMASの装飾で一杯だ。
郷介（43）、木の下で蹲っている。
その手には青いリボンのついた小箱が握
られている。

○福島高校・体育館（1993.03）
卒業式が執り行われている。

○福島駅・改札前
スーツケースを引きながら、改札を抜
ていく彌生（19）。
それを見守る彌生の両親。

○東北新幹線・車内
東京方面の列車に乗っている郷介（19）。

○東京都・アパート・ベランダ
部屋には山のような段ボール箱。
郷介、煙草を吸ってみるが、直ぐに咳込
んでしまう。

○大学・講義室
彌生、教授の授業を受けている。

○福島県・映画館「シニー」・ロビー
行雄（19）、バイトで受付をしている。

○橋の下
郷介（44）、拾ってきた吸い殻の山を広げ
る。そこから煙草を少しずつ集め、レシ
ートで巻いて、ホテルマツチで火を灯す。

郷介、久々の煙草と言うように、ゆっくりと味わい吸う。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）
郷介（19）、行雄、彌生、待っている。
三人共もう制服ではなく、私服だ。

○東京都・オフィスビル・一室（1996.06）
彌生（22）、スーツを着、企業面接を受けている。

○撮影スタジオ
郷介（22）、頭を下げている。
ディレクターの男性、怒鳴りながら、台本で何度も郷介の頭を叩く。
郷介の拳が、固く握られ震える。

○福島県・マンション・一室（夜）
行雄（22）、二〇代女性と共に、ベッドで横になっている。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）
待っている郷介と行雄。
そこへ彌生が遅れて走って来る。

○東京都・銀行・カウンター（1999.07）
彌生（25）、顧客の相談を受け、素早く電卓を打つ。

○福島県・映画館「シニー」・内（2004.07）
行雄（30）、アルバイトに指示を出しながら、店内の内装を変えさせている。
壁に飾られる「グリーゼ革命戦線」のポスター。

○映画館「シニー」・2番館・前（夜）
待っているのは郷介（30）と行雄のみだ。

○河原（2007.08）
大粒の雨。

郷介（58）、石鹸で長く伸びた髪を洗っている。

○東京都・路地裏（夜）

ドラマの撮影を行っている。
郷介（33）、カメラの前でカチンコを鳴らす。

○福島県・映画館「シニー」・2番館・前（夜）

待っている行雄（33）。
そこへ郷介が遅れて走って来る。

○映画館「シニー」・1番館・前（2011.08）

映画館の取り壊し作業が行われている。
郷介（62）、咳き込みながら、その様を眺める。

○東京都・マンション・洗面所

彌生（37）、鏡の前でコンタクトを入れている。
後ろから四〇代男性がやって来て、彌生の腰に手を回す。
彌生、笑って男性の頭を叩く。

○アパート・一室（夜）（2013.02）

郷介（39）、スマホを眺めている。
そこには「グリーゼ革命戦線II、公開決定！」の文字。

○福島県・映画館「シニー」・2番館（夜）

映画館の中で待つ、行雄（39）。
外は大雪だ。

○同・前

郷介（64）、大雪の中、映画館の前に居座っている。何度も咳をする。

○福島駅前（2015.07）

郷介（66）、大きな袋を抱えながら歩く。
チラシ配りの女性から、チラシを受け取

る郷介。
見るとそれは「原発即刻稼働停止」を訴えるチラシだ。
郷介、驚き、ポケットから古めいた紙を取り出す。そこには「遊川奈々」の署名。チラシとその紙は、全く同じものだ。

○東京都・映像制作会社「ビヨンド」・階段
(2015.12)

郷介(41)と宏太、並んで煙草を吸う。
郷介の銜えていた煙草の灰が、ぼろりと落ちる。

奈々(声)「1」

○レストラン(夜)

郷介の前から、香代がお金を置いて去っていく。

奈々(声)「1」

○アパート・一室(夜)

郷介、驚愕し、思わず手を離してしまう。床に落ちたチラシ。

そこには「12月18日、夜、7時、シニ前」の文字。

末尾には「遊川奈々」の署名がされている。

奈々(声)「2」

○東北新幹線・車内(別日)

郷介、流れていく窓の外の景色を眺める。

奈々(声)「3」

○映画館「シニー」・前(夕)

郷介(66)、「グリーゼ革命戦線」のポスターを眺めている。

突如、咳き込む郷介。手を見ると真っ赤な血が付いている。

郷介、口元の血を手で拭う。

奈々(声)「5」

○尾形家・郷介の部屋（夕）

郷介（ハハ）、引出しから、古めいた小箱を取り出す。包装用の青いリボンが付いている。

奈々（声）「8」

○映画館「シニー」（夜）

行雄（ハハ）と彌生（ハハ）、中に入る。郷介も中に入り、戸を閉める。

奈々（声）「13」

○路地裏（夜）

何もない空間に、突如奈々が現れる。その刹那、奈々を車のヘッドライトが照らす。

奈々、ハツとして振り向くと、目の前に車が迫っている。

キキイイイ！と急ブレーキの音。

車は何とか停まるが、ギリギリで奈々に当たってしまった。

奈々、ほんの少し後ろに飛ばされ、尻餅をつく。

運転手の男性、急いで降りて来て、

男性「おい、大丈夫か？」

奈々「は、はい」

男性「それにしても君、いきなり……どっから？」

奈々、男性の話を無視し、歩き出している。

男性「おい、ほんとに大丈夫か？」

奈々「大丈夫です」

と、歩き続ける。

郷介（声）「2」

○映画館「シニー」・劇場内（夜）

郷介、目を瞑り、

郷介「3、5」

○同・前

奈々、走って来て中に飛び込んでいく。

奈々を見つけれ、驚く男性ホームレス。覺束ない足取りで、奈々を追う。

郷介（声）「7」

○同・劇場内

郷介「11」

彌生、郷介から目を逸らす。

行雄、慰めるように、彌生の手を握る。

郷介「13」

郷介の言葉と同時に、

奈々（声）「郷介！」

郷介「?!」

と、目を開ける。次の瞬間には、その場から郷介が消えている。行雄と彌生、啞然として郷介が去った空白を見つめる。そしてゆっくりと振り返る。

入り口には息を切らして立つ、奈々。その

の目は見開かれている。

奈々「どうして……なんで」

と、ふらふらと歩いて来る。

奈々を支える彌生。

彌生「……奈々？」

行雄「……あの時の、はまだ」

奈々「郷介は、どこに行っちゃったの？」

彌生「奈々を探しに、25年前に」

奈々「待っててって、言ったのに」

声「待ったよ」

奈々、振り向いて見る。

そこにはホームレスの男性が立っている。

行雄「おっさん、今日はもう」

ホームレス「久しぶり、でいいのか？ 奈々」

奈々、驚いてホームレスの男性を見つめる。

奈々「……きよ、郷介？」

ホームレスの男性、郷介（66）はゆっくりと歩いて来る。

郷介「待った……待ったよ」

行雄「郷介？……でも、さっき」

彌生「……ほんとに、ほんと？」
郷介「(肩をすくめ)ほんの少し、髭が伸びただけだろ？ なあ、監督」
行雄も彌生も、驚きのあまり、言葉が出せない。
奈々「とつても長く、待たせちゃったね」
奈々「……驚きながらも笑い、
奈々「……私は、皆でこの日を迎えたかったんだよ」
郷介「(笑い返し)……ああ、そうか」
奈々「(弱弱しく笑い)許して、貰えないよね？」
郷介「……かぶりを振って、
いい……どうだっていいんだよ」
奈々と郷介を何度も見返し、驚愕している行雄と彌生。
× × ×
郷介と奈々、並んで座る。郷介の隣には、彌生が座る。
行雄、映写室で上映の準備をしている。
郷介、徐にポケットから、ボロボロになった小箱を取り出す。青いリボンが色あせている。
彌生「……それ」
奈々「……なに？」
郷介「……いや、後でいい」
行雄「(声)「それでは、グリーゼ革命戦線Ⅱの上映に先駆けまして、我らが彌生監督の文化祭上映作品をご覧ください」
彌生「え、嘘！ やめてよ」
行雄「(声)「上映中は席を立たないようにお願いします」
と、スクリーンに文化祭で上映した彌生たちの自主映画が映し出される。
「消えたジャコビニ流星群」というタイトルクレジット、段ボール製のセット、満天の星空、演技をする奈々。
映像はフィルム。所々、カットが不自然に繋がったり、画質が落ちていたりする。

奈々も郷介も笑いながら、それを見る。
恥ずかしがって目を伏せていた彌生も、
結局スクリーンを見て、苦笑する。

行雄（声）「それでは、おまちなか、グリーンゼ
革命戦線□を上映いたします。お楽しみに」
と、場内が一層暗くなる。

行雄、走って来て、奈々の隣に座る。

奈々、郷介の手を握り、

奈々「1」

郷介、最初は驚くが、奈々の手を握り返
し、

郷介「2」

奈々、僅かに口元を緩め、

奈々「1」

と、行雄の手を握る。

郷介「3」

と、彌生の手を握る。

奈々「2」

行雄、奈々の手をしっかりと握り直す。

郷介「5」

彌生、目に涙を溜めている。

奈々「3」

行雄、もう片方の手も奈々の手に重ね、
両手で包み込む。

郷介「7」

彌生の目から、一筋の涙が零れる。

奈々「5」

郷介、苦しい息を我慢しながら、

郷介「11」

奈々、そつと呟くと言うより、自然と言
葉が零れ出て、

奈々「8」

スクリーンには「グリーンゼ革命戦線□」
のタイトルが映し出される。

郷介と奈々、互いを見つめ、

郷介・奈々「∴∴13」

○福島市・全景（夜）

徐に真つ白な雪が、舞い落ち始める。

街は時間が止まったかのように、静かだ。

(了)